

国際理解教育におけるワークショップの役割 — 2つのタイプの参加型実践教育プログラムを通して —

The Role of the Workshop in International Understanding Education — Through Two Types of Participatory Practice Education Programs —

清水和久
Kazuhisa SHIMIZU

〈要旨〉

高等教育においても、講義を受けるだけという受け身の姿勢ではなく、自ら働きかけてコンテンツを作り出すアクティブラーニングの考え方が主流となりつつある。国際理解教育においても、学生自らが国際理解のコンテンツを開発し、ワークショップ型教材として教育現場で実践するという方法がある。本論文では、文部科学省の現代GPに採用された事例を分析し、筆者が今まで学生とともにやってきたワークショップとの比較を行った。結果、ワークショップを国際理解教育のゴールとするのか、国際交流の導入とすることかで違いはあるが、体を動かすワークショップ型の授業は、小学生自身の理解が深まるとともに、学生も教える立場に立つことで理解が深まることがわかった。

〈キーワード〉

国際理解、国際交流、ワークショップ、参加型教育実践

1 はじめに

平成19年度に文部省が行った現代GP（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）に新潟国際情報大学の「地域の国際化を推進する参加型実践教育」⁽¹⁾が選定された。この事業では、新潟国際情報大学と新潟県国際交流協会などの協働企画として、大学生をインストラクターとして育成し、県内小中学校・高校に派遣するもので、地域社会の国際交流意識、地域活性化をうながす意欲的な学生教育プログラムであった。GP終了後も新潟県内の複数の大学が協力して学生の国際教育インストラクターを養成し、同県内の小中高校に派遣、ワークショップ形式の国際理解教育を行っている。

このような参加型実践教育プログラムによって、学生は国際社会に関する基礎・専門知識を習得しつつ、コミュニケーション能力・チームワーク能力を身につけることができる。

学生が行うワークショップは、国際理解に関するもので大学の授業として取り組まれ、学生が1から構想を練って作り出すものである。そして最終的には大学の審査を経て、小中高の現場でワークショップとして行われることになる。

この取り組みを始めた新潟国際情報大学では、学生の授業に対する取り組みが変わり、とても熱心に取り組むようになったとのことであった。平成27年度は16のワークショ

ップが作られ、9月以降学校現場で実施される予定である。

本大学でも学生が小学校現場へでかけていく国際理解教育のワークショップを行っている。対象とするのは、その年度に国際交流プロジェクトを実際に行う学校で、その導入授業としての働きを持つ。その内容は1から作るのではなく、「ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら」と「世界一大きな授業」をミックスして改良したものである。本学の取り組みと新潟国際情報大学の取り組みとを比較しつつ、本学の取り組みの特色を述べ、その相違や効果を明らかにしたうえで今後の本学の国際理解教育のワークショップの方向性を提案したい。

2 研究の目的

・本学の学生が取り組んできたワークショップの特徴を新潟国際情報大学の国際インストラクター養成事業と比較することで明らかにし、国際理解教育の導入学習としてのワークショップの位置づけと方向性を明確にする。

3 研究の方法

- 1) 新潟国際情報大学のワークショップの作成および実施方法の仕方の調査。
- 2) 本大学のワークショップの立ち位置を明確にする

- 3) 国際交流プロジェクトの導入授業である100人村の内容の検討
- 4) ワークショップの効果を検討するために下記の項目について6件法+自由記述で調査
- ① 楽しかったですか
 - ② 内容がわかりましたか
 - ③ 世界のことが知りたくなりましたか
 - ④ その他思ったこと

4 研究の結果

4-1 新潟国際情報大学におけるワークショップの作成と実施方法

新潟国際情報大学では、「国際交流インタラクティブ演習」という授業で、「世界の現実」「世界の不平等」「異文化理解」などの3つの大きなテーマに即してワークショップを開発し、演習の合格者は、新潟県国際交流協会の認証を得たのち同年9月と2月に県内の小中学校、高等学校でワークショップを実践している。平成18年度から取り組まれており、平成27年度までにその他の新潟の大学とも協力して合計90あまりのワークショップが作られている。

平成27年度に新潟国際情報が大学で作られたものは以下の通りである。

- ① 世界の現実として
「平等な命～僕と君はなにがちがうの～」
「紛争という敵～異文化理解は武器となるか～」
- ② 世界の不平等として
「あなたの知らない“あたりまえ”～差別ってなんだろう?～」
「やってみよう“逆再生”～見えない不平等のシステムを探る～」
- ③ 異文化理解として
「虹色（レインボー）文化～あなたの文化はどんな色?～」

題名だけではよくわからないが、先日この大学の学生が作成し国際交流インストラクターとなっていくワークショップがあった。このワークショップはJICA北陸の「国際理解教育実践セミナー」⁽²⁾として開かれ、筆者は、本学の学生とともに参加した。最初は「宗教に対する偏見」を考えるもので、イスラムの女生徒が宗教上の意味をもつ「ヒジャブ」と呼ばれるスカーフを学校でつけることに対する偏見を扱ったものであった。主人公の女子高校生は教師に「ヒジャブ」をとらないと入室を認められないといわれ、最終的にはあきらめて脱いで教室に入った。しかし実は教室の生徒はピアスなど様々なファッションで着飾っており、なぜヒジャブだけが禁止させられるのかというところではその是非を考えさせるものになっている。視聴後、各グ

ループで宗教的色合いの強いものを学校に持ち込むことは禁止されるべきなのか、それも個人を表すものとして認めるべきなのか、話し合った。指導の教員である同大学の佐々木寛教授は最後まで口を出さず学生に運営を任せていたのが印象的であった。一連のビデオの発掘や討論点の設置などもすべて3年次の学生の手で行われていた。

その後、参加者がグループごとにテーマを決めてワークショップを設計し、同大学でのワークショップ作成過程を追体験できた。その後アドバイザーの佐々木寛教授からはワークショップを創作するときに大事な点として以下のような指摘いただいたので記載する。

- ・ 異文化理解には自分の文化を外側から見る必要がある。
 - ・ ある架空の主人公を登場させて物語として提示するとわかりやすい。
 - ・ 体を動かす身体性が高い内容を入れる
 - ・ 振り返りの時間を必ず入れる事
 - ・ 振り返りは全体でなくても1人ですることも考える事
 - ・ 実際に食べる内容があれば、興味は倍増する。
- 今後ワークショップを創作するときのキーワードとしたい。

4-2 ワークショップの位置づけ

前述の国際交流インストラクター養成事業は、自分たちでワークショップを創作する。そのためコンテンツの開発には、世界の現実や不平等などについてかなり深い学習が必要となる。また、実際にそれを実施するためには、座学では身につかないファシリテーション能力が必要となる。(図1参照)

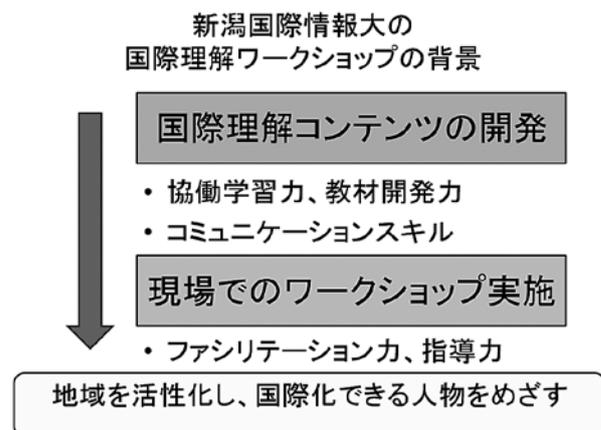


図1 新潟国際情報大学のワークショップの位置づけ

一方本学の学生が行う既存の「世界がもし100人の村だったら」のワークショップは、国際交流の導入授業として、世界に興味を持ってもらうためのものである。そしてこのワークショップのあとは、ステージ2として各小学校は実際に外国と国際交流を行うことになっている。

このステージ2の国際交流プロジェクトは「国際交流共同壁画制作アートマイルプロジェクト」であり、日本と外国の児童生徒がネット上でやりとりしながら、巨大な壁画絵を仕上げるものである。JAPAN ARTMILE⁽³⁾という組織が日本の学校に外国の学校を紹介してくれる。

本学の学生はワークショップをおこなった学校とは、その年度はずっと関わるようになっており、その後のTV会議の支援や、翻訳の支援も行う。

また学生自身も小学生と同じアートマイルプロジェクトに参加しておりフィリピンの大学生と交流を行っている。

学生自身がワークショップをする教師の立場と、アートマイルプロジェクトに参加する子どもの立場の両方を体験することになる(図2参照)

星稜大学生の国際理解ワークショップの背景

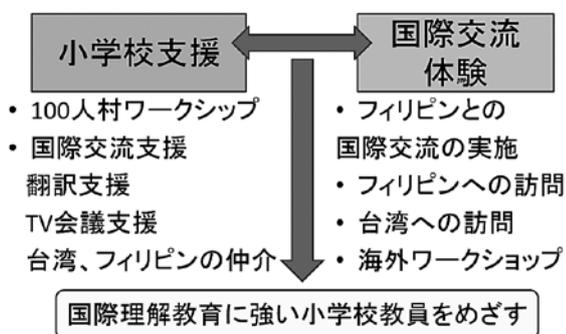


図2 金沢星稜大学のワークショップの位置づけ

両者を比べると新潟の方はワークショップによって教材開発力と地域に入っていくファシリテーション能力が付くことになる。一方本学の場合は、教材開発能力はあまりつかないかもしれないが、ワークショップでのファシリテーション能力に加え、外国へ実際に訪問するという体験と、ネット上ではあるが外国の交流相手とプロジェクトを実行し壁画という成果物を作り出す体験ができるのである。プロジェクトとしては教員と児童生徒の2つの立場を体験することになり、将来小学校教員を目指す学生には非常に実践的なものとなっている。

4-3 ワークショップの内容

4-3-1 100人村ワークショップ

表1 具体的な100人村ワークショップの実施内容

0. 世界の人口
1. 男女の比率
2. 世界の子ども大人や老人の比率
3. 日本の子ども大人や老人の比率
4. *世界の就学状況(新規)
5. 識字の比率 (文字を読めないことのリスク体験)
6. 大陸の分布(住人の比率)

7. 世界の言葉でこんにちは
(日本語は少数言語、英語学習の必要性)
8. 飢餓人口の人数(食料充足度の比率)
9. *食糧問題(国別1週間分の食料の写真提示)
10. 貧富の差の実感(世界のルールでアメの配布)
11. *開発途上国での体験談
(学生によるフィリピンの孤児院体験談)

*は元の「ワークショップ版100人村」に追加したオリジナルの内容である。

ワークショップ版100人の村は、参加者1人1人が世界の住人の1人となって、指示に従って動くものであり、世界の現状を体験的に理解することができる。以下上記メニューより抜粋して様子を述べる。

0, 1, 2, 3では統計的な事実を紹介し、世界の人口や老人と子供の割合では世界では子供が圧倒的に多いのに日本では論陣の方が多いなどを知る。

4 「世界の就学状況」

同世代の子供の現状を理解することをねらいとする。これは「100人村」のコンテンツにはなかったもので、「世界一大きな授業」の教材から「学校に通える子の人数や、ドロップアウトする人数、その理由などをクイズ形式で提示した。学校に関する情報は子供たちにとって興味がわくものであり学校を途中でドロップアウトする子供の数が5人に1人という事実で驚くと思われる。

5 「識字の比率」

高熱で苦しんでいる母のために、子供が薬をもらいに行くのであるが、薬箱におかれているものが、「殺虫剤、下剤、熱さましの薬」の3つであり、文字を読めないために、選択で迷うという設定である。ワーク参加者に選択を迫り、文字を読めないことで困ることを体感してもらう。

7 「世界の言葉でこんにちは」

世界が100人の村だと日本語を話せる人は2人。中国語は18人、英語は8人となる。この情報では中国語を話せる方がよさそうだが、学校で英語を習っている人数は30人ほどになるので、英語を話せれば、世界の1/3の人と話すことができることになる。特に自分の国の言葉を話す人口が相対的に少ない国は英語を学習することで世界の人口の1/3の人と話すことが可能なるという事実から英語学習の必然性を感じさせたい。

10 「貧富の差の実感」

世界の貧富の現状に従って富(アメ)を分けると富裕層20人で82個、中間層60人で16個、最貧層20人で1個となる。富裕層は、初めは多くもらえて喜んでいるが、周りからの冷たい視線を感じることで、積極的に分けたいと思いを持つようになり、中間層は、自分たちが人数の割に給の数が少ないことに気づき、ともすると力づくで豊かなグループから奪うという言葉が予想される。貧しいグループは、1個というあまりの少なさに、分け方の行動までつな

がらないかもしれない。

この話し合いの場では、学生のファシリテータの出る場面で、3つのグループからいかに意見を引き出すかが試される。

4-3-2 国際交流の必然性につながるワークショップ

世界の現状を知るだけでは、国際交流プロジェクトにはつながらない。そのためなぜ国際交流が必要かについて学生のワークショップの後で筆者の方で補足情報として提供している。ゆくゆくはこれも学生のワークショップの中に入れていきたいと考えている。

補足内容としては、「世界には環境破壊やエネルギー問題、局部的紛争など多くの問題が山積するが、自分たちが大人になっても日本だけでは解決できず、同世代の多くの人の知恵を結集する必要がある。そのためにはコミュニケーションの手段として、英語が必要であり、自分の意見を主張しつつ、相手の意見も取り入れ、結論を導き出す力が必要である。アートマイルプロジェクトは外国の友達と話し合い、最終的に作品を作り上げるので、上記の力がまさにつくことになる。

4-3-2 ワークショップのアンケート結果

筆者は、100人村のワークショップを平成26年度にアートマイルに参加した石川県内の小学校9校500人に対しておこない、同時にアンケート調査を行った。

表1 ワークショップ後のアンケート結果

質問項目	3+	2+	+	-	2	3
1. 楽しかったですか	80%	15%	3%	1%	1%	1%
2. 内容が分かった	58%	27%	9%	4%	2%	2%
3. 世界のことを知りたいか	63%	22%	10%	2%	1%	2%

合計9校、述べ500人の児童に100人村のワークショップを行った。(n=467) 数字は%

楽しかった理由としては、自分がその村の住人となって参加できること、クイズ形式で答えを予想し考えること、そして何よりも自分が動き回ったことを挙げている。

内容理解に関しては、3、4年生の場合は既習の知識外のこともあり少し難しかったようである。世界に関する興味関心は高く、いつもは自国の生活が当たり前とっていたが、アメの分配などで不平等な扱いを受けることを体験することで、その理由を知りたいと感じ、海外に興味を持つ児童が増えたようである。

5 研究の考察

学生自身の国際理解教育としてワークショップを創作し、実施することに重きを置くやり方と、ワークショップに国際交流体験の導入としての役割を持たせ、国際交流体験を重視するという2つの事例を挙げた。

前者の良さは学生が問題意識をもって教材作り出すことになる点と、児童生徒の前でファシリテータとしてアドリブ的に進めていく力量が要求される点である。後者の良さは、ワークショップは既存のものを改良しておこなうが実施中は前者と同様に臨機応変な対応が必要とされる点、さらに、実際の国際交流の支援として小学校に入っていく点、最後に学生自身が国際交流体験で、外国の学生と共同で成果物（壁画）を作り出す点である。

前者は学生を国際交流インストラクターとして育て地域で活躍させることに重点を置いているが、後者は学生が児童生徒の立場となる国際交流体験と教師の立場として実施する点ワークショップの2つの側面から見ている。

新潟の国際交流インストラクターを養成するシステムは大変魅力的であり、学生自身には大きな力が付くと思われる。しかし、ワークショップの知識が、学生自身が体験したものであると力が増すと思われる。その意味でも国際理解教育では、学生自身の国際交流プロジェクトの体験や、直接、交流相手に会うという体験も重要であると考えられる。ワークショップの作成も本からの知識だけでなく、現地を訪問して感じたことなどの情報も加味して作成できるようにしたい。

今後、海外との交流体験を生かし、学生が感じたことをもとに創作したオリジナルの国際理解ワークショップの作成にも挑戦したいと考えている。

注

- (1) 新潟国際情報大学 国際交流インストラクター事業
<http://www.nuis.ac.jp/iuip/>
- (2) 独立行政法人北陸JICA
<http://www.jica.go.jp/hokuriku/topics/2015/150715.html>
- (3) JAPAN ARTMILE
<http://artmile.jp/>

参考文献

- ・ロバートチャンバース著 2004「参加型ワークショップ入門」明石書店
- ・居城克彦 国際理解教育20 「スタディーツアーにおける学びと変容—グアムスタディーツアーを事例に—」2014 明石書店